
不思議な人。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な人。

【Nコード】

N9988X

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

マンシヨンの下に突っ立っていた背の高い男。一体何をしてるんだろう？

そんなよく分からない人物に興味を持って、観察をして、でもやっぱり分からないから、直接声をかけてみる。

きっかけは好奇心。

すべてはそこから始まった。

世の中には色々な人がいる（前書き）

私の書いた、同タイトルのお話に心当たりのある方へ、すみませんリメイクです（^^）；

アルファポリスの「青春小説大賞」に安易な気持ちで、既存作品でエントリーしよう！

と、思い見直してみたのですが…

あまりにも稚拙で恥ずかしくて、さっくり書き直しに走ってしまいました。

別物になると他に響くので、軌道を外れないように心がけてます！！
それと、今以前のは引っ込めてます。

世の中には色々な人がいる

おーっ、良く撮れてる。現像したばかりの写真を作業台に並べ、その出来に私は笑みを浮かべる。これはなかなか……これはまた良い小遣い稼ぎが出来そうだ。

その時不意に、ワグナーのワルキューレの騎行の序曲が鳴り出した。堂々として、踏ん返り返りたくなるような曲、私はこの曲が大好きなのだ。

ワルキューレ〓北欧神話の戦の女神は、戦死者の中からヴァルハラへと受け入れる勇士を選定する役目を持つらしいが、私の抱いているイメージとしては勝利に導く女神だ。輝く鎧に身を包み、天馬に乗って戦場を駆け抜ける。その姿に兵士達は奮い立ち、勝利を求めて勇猛に突き進む。もちろん戦争は嫌い。でも、まるで何かに立ち向かうためにあるような、この堂々とした曲はたまらなく好きだ。って、聞き入ってる場合じゃないな。

作業台の上に置いてあるラスベリーピンクとかいう色の携帯が、曲に合わせて明滅し着信を訴えている。もちろんこの携帯の持ち主は私。

携帯を開くと『母』と表示されているが……さて、何の頼まれ事だろう？ 通話ボタンを押して右耳に当てると、いきなり雑音が聞こえてきた。どうやら今は外らしい。

「何？」

「あー美晴^{みはる}？ 今家にいる？」

「いるけど？」

「あのね、母さんの机にある写真持って来てくれない？ 封筒に入ってるんだけど。」

「ああ、ちよつと待って。」

携帯を耳に当てたまま母の部屋に向かう。私の母はカメラマンをやっついていつも忙しそうだ。出版社と契約し、結婚式場にも出入

りし、おまけに写真集まで出した事がある。女やもめは大変なのだろう。が、いつも楽しそうに仕事をしているので、悲壮感なんてものは感じない。母がどう思っているのか本当の所は分からないけれど、母と娘二人、女ばかりで結構仲良くやっているつもりだ。

「部屋に來ただけで、写真の入った封筒……っていっぱいあるんだけど、どれ？」

机の上と言わず、棚や床に置かれたダンボールにも同じような封筒が積み重なっていて、どれが必要な封筒なんだか私にはさっぱり分らない。

「上原様って書いてあるから。」

肩で携帯を支えてその文字を両手で探す。とりあえず手近な位置を上からどかしてみると、3番目に『上原様』と母の字で書かれたものを見つけた。やった、簡単に見つかってラッキーだ。

「上に原っぱの原ね？ あったあった。」

「ごめんねー、今日急に取りに來るって言われちゃって、いつもの喫茶店にいたから、じゃあよろしく〜」

よろしく〜って、近いじゃないか。取りに帰ればいいのに。と、思わなくも無いが、そこは昔から母のお気に入り場所で、気分転換の場所でもあるらしい。

ル・シュクリエ

『Le sucrier』フランス語でシュガーポットという名の、シックな色使いの落ち着いたあの店は、コーヒーが絶品だという。年配のマスターが一人でやっていて、行くといつもジャズが流れている。長年の常連客の憩いの場といった感じた。かくいう私も親に付いて幼い頃から通い詰めている常連の一人なのだが、でもまだあの店のコーヒーは飲んだ事が無いので、相変わらずコーヒーの評判は伝聞でしかない。

「はいはい、了解。」

通話を終えて部屋に帰ると、チャコールグレーのお気に入りのコートを羽織った。携帯と小銭の入った財布、デジカメをポケットに突っ込み、届ける写真の入った封筒を持って、ブーツを履く。よし

つ、これで準備完了。つと、その前に。

「和歌奈、ちよつと母さんに届け物してくるから、後よろしく。」
出口脇のドア、私の部屋の反対側になる妹の部屋に向かって一言かけた。返事はおざなりな「んー」ってだけだった。

> i 3 3 7 3 6 — 4 2 0 4 <

母さんに奢ってもらおうと、意気揚々とエレベーターで1階に下りてきたものの、障害物を見つけて一気にテンションが下がった。

マンション出入口のど真ん中に立ち止まって、道を塞いでる迷惑な男がいる。おそらく180cmを超えていると思われる長身。そんなにでかいやつが行く手を阻んでくれると、邪魔以外の何物でもない。

突っ立って何をしているのかと、少し観察してみたが動く様子は無い。しいて言えばガラスの向こうの外を眺めている。そのくらいしか私には思いつかない。けれど外にある物といえば、まあサザンカがキレイに咲いていが、他の木は冬を前に葉を散らしほぼ裸の状態だ。ぎりぎり向こうの花の無い常緑樹が見えるかな？ 花壇に植えてあった花も、少し前に抜かれてしまい今は土しかない。何をそんなに見るべきものがあるのだろうか？

こうやって観察していても時間が過ぎていくだけで、ようとしてその意図は読めない。いくら好奇心の僕である私でも、さすがに時間^{しもへ}の無駄かと思ひ始め、彼の探求は断念する事にした。いきなり『何をしてるの？』と声をかけてみるのも悪くないが、もしも彼が不審人物だった場合、面倒な事になるかもしれない。そして万が一長引くと、母に迷惑をかける事になる。それだけは絶対にしたくない。普通に歩いて近付いてもまったく気付いてくれない。どれだけ集中してるんだこいつは？ 封筒を胸に抱えてゆっくり息を吸い込んだ。そして一気に勢いで声を出す。さすがにここまでやればこいつも気付くだろう。

「すみません、通れないので退いて下さい！」

すると男は少し肩を揺らした。驚いてくれただろうか？ だとしたら嬉しい。『やった！』って気分だ。それから彼はゆっくり振り返ると私を見下ろす。……でかいな本当に。

年の頃は二十歳前後くらいだろうか？ 私よりは間違いなく上だ。染めていない髪は適度な長さで悪くない。ただ無精ひげは残念に思う。無ければ結構良い男なのかもしれないのにな。

彼は無表情の無口で見下ろしたまま、何故か動こうとはしない。人がわざわざ退いてくれて言ってるのに、退かないのは何故だ？ 「えーと、聞こえてますか？ 邪魔なんで退いて下さい。」

もう一度言つと、ようやく彼は右側に三步下がり場所を空けてくれた。最初の言葉は聞いてなかったのか？ いやでも驚いて振り向いたよな…… まったく妙なやつだ。

私はどうもと声を掛けて通り過ぎ、そのまま外に出た。その間男は一言も発しない。ドアが閉まってから振り返って窺うと、今度は道を塞がない位置に移動し、また外をじっと見ている。十一月も半ばに差し掛かり、気温もぐつと下がってきたというのに、厚手とはいえ白っぽい長袖シャツに下はジーンズという姿では、見ているこっちの方が寒い。

そんな事を考えていると、うつかり彼と目が合った。じっと見過ぎてしまったようだ。少し気まずい気分になった私は慌てて目を逸らし、急いでその場から逃げ出した。

指定の喫茶店の扉を開けると、上部に付いてるベルがカラランと良い音を響かせる。少し低めの音は店の雰囲気に対応しい。この聞き慣れた音は、色々な記憶と結びついていて大好きだ。

「こんにちは。」

「いらつしゃい。」

しかし、同時にかけられた声に覚えは無く、一瞬『？』が頭を占

めた。声の主はかなり見た目の良い茶髪の青年で、トレイを右手に掴んだままカウンターにもたれ掛かっている。アルバイトでも雇ったんだろっか？ 年は二十台半ば辺りで正解だろう。第一印象としては軽そう？ いやあの笑顔は底が見えないタイプという可能性もあるな。うん、その方が面白そうなので、そっちを採用しておく事にしよう。

私が無駄に勝手にそんな事を考えていると、カウンターの向こうのマスターが、いつもの笑顔で迎えてくれた。

「美晴ちゃんいらっしやい。」

うん、これこれ。やっぱりこれが無いと、この店に来た気がしない。

「こんにちは、マスター。」

「こっちこっち、早かったわね。」

マスターの正面の、カウンターのいつもの席で母が手招く。自分としては、思わぬ事でしつかり油を売ってきたような気もするのだが、『早い』と思われるのなら否定はしない。

今迄、母とマスターと新顔の青年とで喋っていたのだろう。母達の配置はそうとしか取れない。今他に客がいらないからいいもの……って、いや、客が居ないって事の方が問題のような気もする。

とにかく近くに寄って封筒を渡す。

「近いじゃん。」

そう一言付け加えるのが重要だ。多少恩着せがましく言ってみれば、恩を売ったような気分になれる。そしてその恩はすぐに効果を表してくれる。まあこれは、母さんくらいにしか使わないけどさ。

「まあいいじゃない、ありがと。何か飲む？」

「ミルクセーキ。」

私はメニューも見ずに即答する。

「聞くまでも無かったわね。」

母はそう言って笑った。

「何となく……ね。ここは、これじゃないと嫌なんだ。」

父も一緒に来てた頃から変わらない。きっと変えたくないのかもしれない。父はもういなくなってしまうたけれど、だからこそ、ここはこれじゃなきゃって思う。

「はい、お待たせ。」

私がコートを脱ぐ間も無く、ましてや座りもしてないうちから、マスターがカウンターに私専用のカップを置いた。線の細いカップじゃなくて、子供が持っても大丈夫そうなどつしりと安定感のあるピンクのマグカップ。いつから使っているのか記憶に無いけど、ずーっとこれが私の前に出てくるのだ。

「早っ、お待たせって、私待つてないよ？」

「美晴ちゃんが来るって言うから、先に準備して待つてたんだよ。」
そう悪戯っぽい事を笑顔で言うてくれると、とても嬉しい。けど口はそんな風には動かないのが私つてもものだ。

「うっ、やっぱり何か敵わないな。」

「聞いてた通りの子だね。」

すると、急に例の知らない青年がやたらと盛大に笑ってくれた。今迄ずっと私を観察でもしていたのだろう。これまでに私の話題がここに上った事は想像に難くないが、聞いてた通りっていう部分は何となく面白くない。

「はい？」

多少険しい気分でいると、母がカップを持ったまま彼の紹介に割って入った。

「あのね、この人はマスターのお孫さんの北川文紘くん。きたがわふみひろ 大学を出て、そのまま『ここで働く』って、押しかけてきたんですって。」

「いやあ、就職失敗しちゃって……。」

彼はやはり笑顔で、人事のように爽やかに笑っているが……それで良いのか？

それは彼の人生で、どうせ私には直接関係など無いが、やはりこの笑顔は裏を見せない類のものかもしれない。何となくそう思った。うん、どっちでもいいんだけどさ。

日常に入り込む好奇心とその理由

学校からの帰り道、友人の安田葵と、よくある他愛の無い話をしながら住宅街を歩いていた。6時限までであったものの、二人ともクラブには所属していないので、時間は早くまだ明るい。

「この間さ、聡太そつたが女の子と一緒にいたの見かけたんだけど……彼女出来たのかな？」

そう、他愛の無い話とは恋愛話。出来過ぎなほどキレイな顔を翳らす葵の、無自覚な恋愛相談……というか、とにかく普段から聡太くんの話ばかり聞かされている。

聡太くんというのは、フルネームを為井聡太ためいそつたという。葵の二つ下の弟と同級生で親友だ。まだ中三ながら見た目は抜群、成績も優秀。そんな所に弱い女子からは絶大の人気を誇り、私の商売は大繁盛。けど、少々気が弱くて運動は苦手なだけだね。

一方、葵の弟の航わたるはその反対で、勉強は得意じゃないけどよく動く。見た目はまあ、そりゃ葵の弟だもんなって感じ。でも弟の方が少し人懐っこい印象がある。けど二人が並ぶと、どうしても聡太くんの方が目立つちゃうから、何となく損をしてる感はあるかもしれない。

あの二人は性格が随分違うけど……でもだからかな？ ちっちゃい頃から仲が良かった。よって、葵と聡太くんも小さい頃からの幼馴染だ。

ただ問題なのは、この二人どっからどう見たって両思いだったのに、何故か本人達には分からないらしい。どっちもウジウジして全然動かないから、『早く付き合ってしまったえっ！』……と、周りは皆ヤキモキしてるってのが裏側の話。

ああ、そういえば思い当たる事があった。今回の件はあれだなと

携帯を開き『理佐ちゃん』というフォルダに仕分けられた一件のメールを表示する。そしてその一部分を読み上げた。

「名前は石川朋花同じクラスで、二学期のはじめに転校してきた子……らしいよ？」

葵が呆れた顔をして私を見ている。

「いつもながら詳しいわね。」

「黙ってても、情報の方からやってくるのさ。」

そう、別にこの理佐ちゃんという情報提供者に、私から頼んで送ってもらったものではない。兄思いの妹からの善意の報告。彼にとつては可哀相としか言い様が無いけれど、情報ソースは完璧だ。

実はこの二人の仲に一番ヤキモキしているのが理佐ちゃん、さつさとくつつけてくれて私はお願ひされている。双方と付き合いがあるし、自他共に認めるお節介な性格でもあるからなのだろう。でもなー、私にはその気は無いんだよね。

そりゃ、見ててイライラする気持ちは分かる。だけどこういうのは他人が出る幕じゃないって思ってるから、様子を見ようよって宥めてるんだけど……やっぱりこうして逐一色々と情報が送られてくるから困ったもんだ。

「そっか、立派な諜報員がいるもんね。」

今の台詞を、葵がどんな顔をして言ったのか実は知らない。声の調子からすると呆れているのは確実だろうけど、私は別の人物を見ていた。

「とにかくその子は彼女じゃないよ。今の狙いは聡太くんじゃなくて、葵の弟くんだったさ。」

口はメールにあった続きを要約して答えたが、目は脇の公園の一点を捉えて離せなかった。この間マンションの一階にいた不審人物あの彼を見つけたのだ。あの邪魔だった男、何してるのかさっぱり解らない男、寒くないのか不思議でしよっうがなかった男。

「……本当に詳しい事で、って航!？」

通学路にしている住宅街の中にある第二公園。鉄棒の向こうにある半分埋まったタイヤに座り、じっと石碑に向かっている。こちらからは背中くらいしか見えないが、やっぱり今日も何をしているのかは分からない。

あの石碑は地元出身の画家を称えたもので、亡くなってから建てられたと聞いた事がある。その画家について詳しい事は知らないけど、明治の生まれの日本画家であるらしい。大きな岩を割り、磨いた面に一本の木と一遍の言葉、そして花押が刻み込まれている。

「美晴？」

石碑で無ければ、あの上に留まっている数羽の小さな鳥だろうか？ あの方角にある物はそのぐらいのもので、まさか隣りの家の壁や屋根つて事は無いだろう。

「みーはーるー？」

気になる……彼は一体何をしているんだ？

「あの人ならこの間も見かけたよ。美晴そんなに気になるの？」

「っ!?!……びつくりした。」

完全に彼に気を取られていた私は、急に葵に抱きつかれ相当驚いた。

「だって、立ち止まっちゃうし、呼んでも気付かないんだもの。」

意識が完全に件の人物くたんに行っていた私は、不覚にも自分が立ち止まっている事にすらまったく気付いていなかった。

「ねえ、何でそんなにあの人見てたの？」

すぐ傍にある腹の立つほどキレイな顔を見ると、とても楽しそうで空恐ろしい。けれど、そう言われて私は初めて理由を考えた。本当に何故なのだろう？

「うーん、そうだな……気になるから？ うん、妙なやつで何かすごく気になる。」

自分でも漠然とし過ぎて良く分からないけれど、彼のやっている事がさっぱり理解出来ないって言うのが、とても気になる……とい

う部分は確実だ。そしてその理由はとても自分で気に入ってしまった。

「うわ、美晴の好奇心出た。」

「うん、そうそう、私のセンサーに引つかかる感じ？」

「その不適な笑み、ちよつと怖いよ？」

勝手な事を言っただけで離れて行くが、さっきの葵の顔だって何かやらかしそうで十分怖かったさ。彼女がやたらとキレイに笑った後は、大抵碌な事がない。それが私に向けられたものでさえなければ面白けれど、こちらに向けば面倒なになりかねない。

「失礼な、放つという。」

この間も彼はまったく動かない。本当に何をしてるんだか……ああもう気になる。でも、今動くのはきつと得策じゃない。さっきのあの葵の顔を見てしまうと、何か弱味でも握られそうな気がして動くに動けない。自分にとつてのプラスとマイナスを色々計算した結果、後ろ髪を引かれる思いで私は彼から目を離れた。

また縁があれば会うだろう。とりあえずそう納得した事にして、葵を置いてさっさと一人で歩き出した。葵の無用な冷やかしと不満は、今は聞かない！

彼の見ている世界はどんなものだろう

それから一週間。彼と私は相当縁があるようで、毎日のようにその姿を見かけた。

いつも彼は何かをじっと見ている。神社の下の池や、河川敷の岩、公園の木に、港の側で海を眺めている事もあった。やっぱりよく分からないけど、ずっと共通する何かを見てるんだろうか？ それとも毎回違うのかな？ 何のために見てるんだろう？ そして何を考えているんだろう？ とにかく私は、それ以外の姿をまだ見ていない。

その姿を見かける度に、気になって気になって、最後にはイライラする。彼も私も暇人だなと正直思う。けど、そのくせ一方では探し物をするゲームみたいで面白いと思う自分もいる。おかげで最近、どこに行っても彼がいなかったと目で探す癖がついてしまった。でも、もちろん見ているだけでは、私の好奇心が満たされるはずも無い。

見ているだけでは理由は分からない。

だからその理由を訊くために、そして自分自身の精神の安定のため、思い切って彼に声を掛けてみる事にした。

今日の彼は、うちのマンションから程近い川土手でじっと空を眺めていた。

ここは登下校時にいつも通る道で、脇には等間隔で桜が植えてある。春には見事な花が咲き誇る道。しかし今のここは、残念ながらただの立ち木が並ぶ川土手でしかない。おまけに灰色の曇り空に、赤く染まる葉が少しばかり残る程度の木々という組み合わせは、どこかもの悲しさすら感じる。

しかし彼は、そんな木の一本に寄りかかって、どんよりした空に

険しい顔を向けている。本当に何をしてるんだろう？ 私は彼の側で止まると、意を決して声を掛けた。

「ねえ、何見てんの？」

しかし彼はこちらを一瞥したものの、何も言わずに視線を再び空に戻す。どうやら無視するつもりらしい。そりゃ誰とも知れぬ人物に、いきなりそんな事を言われたら嫌かも知れない。けど、何も返してくれないってのは酷くないか？

謎の人物ってのは面白そうだけど、実は正直苦手でもある。しかも向こうはいつも機嫌が悪そうで、はつきり言って近寄り難い。私は普段ヘラヘラするように勤めてるけど、内心はそうでもないんだ。「無視しないで教えて。この間から、ずーっと何やってんのか気になっただけになっただけじゃないの。」

寒いはずなのに握った手のひらには汗がにじむ。私だって結構な決意で声を掛けたんだぞ？ そりゃ私が勝手にやってる事だけど……でも、ここで諦めたら私はずっと答えが得られない。そしたらずっと分からなくて、このイライラも治まらない。それは絶対に嫌だ。「だから、何やってんのか教えてよ。」

私はじっと彼を見た。空は見てるだけでなかなか楽しいってのに、いつもいつも不機嫌全開みたいな顔してるのは何故だろう？ 雲はずっと変化し続けて一度も同じ時は無い。ずっと空見てるくせに何であんな顔しか出来ないんだろう？ それにしても、やっぱり無精ひげはいただけないな。剃ればいいのになって本当に思う。

やがて彼は根負けでもしたか、諦めたようにこちらを見て溜息を吐いた。ようやく話してくれる気になったか？ と、そう内心でほくそ笑んだものの、喜ぶのはまだ早かった。

「空。」

彼の答えは、期待外れも甚だしい。

「空なのは見れば分かる。そんなにじーっと見て、何がしたいの？ 何考えてんの？」

年下だと思つて、いや、女だと思つてバカにされてるんだらうか？ それとも実は空の觀察するのが仕事だとか？ いや、そんな事はないだらう。彼が見てるものは、私を知る限り空だけではない。きつと今の私は彼を睨み付けているんだと思う。こういう扱いを受けるのは、もちろん好きじゃない。場合によつては笑顔を押し通す事だつて出来るけど、今は何となくしたくなかつた。すると彼はもう一度溜息を吐き、またよく分からない事を言つてくれた。

「……目に見えるものと、目に見えないもの。」

はい？ それは禅問答か何かなのか？

そうか分かつた。そつちがやる気なら私はとことん付き合つてやる。物好きだと自負する私のやる気は、俄然湧いた。闘志という言葉に置き換えたつて間違いない。

「目に見えないものつて何？」

私は彼を真つ直ぐ見据えて問いかける。

「さあ？ まだ見えないから分からない。」

しかし彼は、こちらを見ようともしてくれない。

「どれだけ見れば、見えるようになるの？」

「さあ、どのくらいだらうな？ 俺も知りたい。」

そう言つた彼は薄く笑つた。自嘲だらうか？ それとも少しはこちらに興味を示してくれたのだらうか？ ならば。と、私は質問の種類を変えてみた。

「そんな格好で寒くないの？」

急に話題が変わつて空回りしたのか、片方の膝が抜け少し体がずり落ちた。よしよし、乗つてきてたんじゃないか。ようやく私のペーイスに載せた確信が持て、今度こそ内心でほくそ笑む。

「寒い。冬は寒いのが当たり前だ。」

体勢を立て直して不機嫌な声を出す彼の格好は、黒いシャツの上に茶系のチェックのネルシャツだけだ。先日よりはマシではあるものの、まだ見てる方が寒い。まったく、寒いからこそ、暖かい格好をするものだらう？ だから私はコートを着て、マフラーを巻いて、

おまけに手はポケットの中だ。

だけど、これで私は完全に興味が湧いた。まったく面白いやつだと頬が緩むのを隠せない。訳が分かんなくって最高に面白い。まるで新しい玩具を手に入れた子供みたいにワクワクする。

今の彼は目に見えて不機嫌だけど、バツが悪くて拗ねてるだけだ。話しかける前の印象とは随分違って、何だかとても嬉しかった。

彼が見上げている空を、私も同じように見上げてみる。一面に雲が広がり、太陽はその向こうで薄い光の輪郭を見せているだけだ。彼の言う『目に見えないもの』とは何だろう？ もし、この雲が晴れて青い空が見えれば、せめて雲の切れ目からその青が覗けば、彼の言うその何かが見えるのだろうか？

彼の目は依然空に向けられたまま、何も話す気なんか無いとばかりのバリアを感じる。それ所か、私の存在を無いものだとも考えているかもしれない……。

でもそんなのは許さない。許せる訳がない！ 私は彼に興味を持つんだ。

おおがきみはる
「私は大垣美晴。覚えといて。」

大きく息を吸って一方的に名を名乗る。そしてそのまま家に向かって走った。返事なんか期待してないから、どんな反応だったかなんて知らない。それにどうせ返事なんか待つだけ無駄だろう。

でも今に見てろ、絶対にそのバリアを破ってやるから！

けど今は家に帰れば色々やる事が待っている。ここで油を売った分、夕飯の支度を急がなきゃいけない。

彼と違って、私はとっても忙しいんだ！！

笑ったのは店へと向かう橋の上

さて、今日のタイムセールはタマゴと豆腐、火曜だから朝分の魚も買って、牛乳も少なかったから……と、買い物リストを頭に刻みつけながら、夕方の道を自転車でスーパーに向かっている途中、久しぶりに彼を見つけてブレーキをかけた。

一方的に名乗って以降、しばらくの間どこに行っても彼の姿を見かける事が無かった。別に待ち合わせしてる訳じゃないから、ただタイミングが合わなかったただけだろう……とは思っていたけど、どこか物足りないような気がしていたのは間違いない。

十二月に入り空気はまた一段と冷えた。それなのに……彼は寒さに強いのか？

殊更寒い風の吹き抜ける橋の上の反対側で、じつと川を眺めている。西の空は朱から薄紫へと染まりつつあり、あの美しさには心が躍るっていうのに、どうして今日は川なんだ？

でも、今日はさすがに薄着じゃなくてグレーのコート。おまけに首には紺色のマフラーも見えて安心した。もし今日も薄着だったとしたら、今背中に貼ってるカイロを無理矢理にでも渡してしまっただろう。寒がりの私には、今はそれくらいしか押しつけられる物が無い。

しかし、手をポケット突っ込んで、一体何を見ているんだか……。街灯の光を映す川面か、水の流れに身を任せる草か、泳ぐ魚は……見るにはもう少し暗いか。

一人で色々考えてみたって、やっぱり何だか分からない。セールの時間が気にはなるものの、結局私は好奇心には逆らえないんだよね。

彼とセールを一瞬だけ秤にかけて、あっさり自転車を反転させた。考えるまでもない。久しぶりに見つけたんだ、ここで逃してたまる

もんか。

身の切れそうな冷たい風に負けず、全力でペダルを漕いで橋の手前の横断歩道に向かう。冷え過ぎで痛む耳は、もう少しで頭痛にリンクアップしそうだ。惜しくも間に合わなかった信号を待つて、反対側に急いで渡る。そして速度を緩め、彼の側で自転車を止めた。

「久しぶり。ねえ、名前は何ていうの？」

自転車に跨ったままいきなり声を掛けると、彼はこちらを目で確認して溜息をこぼした。またかという態度は少々面白く無いものの、覚えてくれて良かったと思う。

彼は川面を眺めたまま、諦めたように口を開いた。

「しき。」

そして私は呆然とする。こんな突然で強引な質問に、あっさり答えが返ってきて拍子抜けしてしまった。もう少し、こう……一人で一方的にウダウダと突付き回す事を想定してのジャブだったのに、こうもすんなり答えてくれると後の予定が完全に狂う。けど、『しき』って何？

「しき？ それはどこの部分？ 名字？ 名前？」

訊いといて何だけど、『しき』って名前はあるのかな？ いや、でも実は日本の人じゃなかったら、そんな名前もあるかもしれない。こっちは既にフルネームで名乗っているし、どうせなら両方聞き出したい。別に悪用しようとかって訳じゃなくて、彼だやつだと不確かなのばっかじゃなくて、きちんと呼び名を決めておきたい。

「自称。」

「はい？ 自称って何？ 本名は？？」

じ、自称って、どちらでも無いってどういう事だ？ 私は適当にあしらわれただけなのだろうか？

「俺には不釣合いらしいから、使ってない。」

いや、別にあしらわれた訳では無いらしい。彼は目を閉じ溜息混じり。相当浸りこんでる感じか？ けど自分の名前が嫌い……とか

いうのでも無さそう。不釣合いとはどういう事だろう？ 私の印象としては、立派過ぎる名前を付けられていたとしても、それに負けるような外見だとは思わない。うん、ひげは相変わらず邪魔だと思っけど。

じゃあ逆？ 珍名で気に入らない？ いや、それだと『不釣合い』という表現にはならないか。

うーん、もし苗字を拒否するのであれば、家？ …… そうだな。家族と何か問題があるという事かもしれないか…… けど名前も、ってのは何だろう？

「……じゃあ、『しき』ってどんな字？」

「歴史の『史^し』に、『稀^{まれ}』」

どうした？ 面倒そうな顔してるくせに、これも素直に答えてくれるじゃないか？

うーん、『史^{しき}稀』か。ペンネーム、ハンドルネーム…… そのくらいの雰囲気だよな。

「その意味は？」

そう尋ねると、彼…… いや、史稀は驚いた顔をして私を見た。よしよし、やっと私を見る気になったな？ ほんの少しでも彼のバリアに穴を開けたような気がして、私は内心ガッツポーズだ。そしてたぶん顔は笑ってる。寒くて表情筋おかしいけど、この内心の喜びは隠せていないはずだ。

史稀はしばらく躊躇して、それでも律儀に話してくれた。非常に素直な性格の人間だったらしい。

「……長い歴史の中で、変わったやつが居てもいいだろうって。」
とてもバツが悪そうな彼に、私がまず思ったのは。聞かれて恥ずかしいなら、そんな名前を名乗るな！ そして、名乗るんなら自身を持って！ だ。中途半端が一番悪い。

とりあえず、その意味から受ける印象としては、彼は彼を取り巻く環境の中で異端な存在である？ とか、そんな所だろうか？

「……笑うな。」

意外と単純なネーミングセンスに、思わず笑ってしまった私にすかさず苦情が申し立てられる。

「悪い、つい。」

「つい何だ？」

大分薄暗くなつて、はつきりとは見えないが、以前のような無表情ではないらしい。もし今が明るければ、赤い顔が見られたかも知れない。そう思うと非常に残念だ。

「いや、単純だなつて。」

「うるさい、余計なお世話だ。」

「うん、私お節介だもん。でもさ、名乗るなら堂々とすれば？」

「……変なやつだな、お前。」

その声はやや笑いを帯びて、また少し穴を広げた気がして心が躍る。

「うん、よく言われる。でも一つだけ訂正しとく。お前じゃなくて

『美晴』^{みはる}。私には大垣美晴^{おおがきみはる}っていう名前があるの。」

たぶん名前を覚えてくれてはいないだろうから、念を押すように二度も名乗った。この前は、印象さえ残せればそれで良かったから、どっちでも良かったんだけど、今度はさすがに覚えて欲しい。

「そういえば、前にもそう言つてたな？」

「ほーら、やつぱり覚えて無い。」

「仕方ないなあ。み、は、る。だからね？ 今度は覚えといてよ。」

「さて、どうだろうな？」

「それと。……史稀も十分変なやつだから。」

私の中での史稀はこれで確定している。人の事は言えないんだぞ？ それにしても、彼の言葉の雰囲気^{雰囲気}が急に柔らかくなったような気がする。

「お互い様かよ……。」

ほら、軽口が出た。だとしたら嬉しい。

「そうなんじゃない？」

私があっさりそう答えると、彼は驚いた事に笑い出した。冷笑と

か苦笑とか、ましてや微笑なんてものじゃなくて、失笑……だよ、これ。

とにかく、何でそこまで??? ってほど笑ってくれた。

ひょっとして私は、バリアに穴どころか、中にまで進入する事が出来たのだろうか？　ずっと不機嫌だった彼は、もっと取っ付き難いと思ってたのに、予想よりも遥かに親しみ易いタイプなのかもしれない。

『予想外』

私はその言葉を、彼の印象に付け加えておいた。

1 パックのタマゴの縁

「間に合えっ！！」そう願いながらペダルを踏む足に力を込め、スピードを上げる。充実感と引き換えになった時間というのは、家計にとって実は大きい。

スーパーの駐輪スペースに滑り込むと、急いで施錠し売り場に向かう。入り口でカゴを掴み、出来る限りの早歩きで売り場に向かう。豆腐は余裕！ 冷蔵の棚から2つ取って、その奥にあるタマゴ売り場に急ぐ。

……けどアウト。残念ながら間に合わなかった。あと少しという所で、最後の一つを目の前で持っていかれた。

1 パック88円。同じ数で違うパッケージのタマゴなら、隣りに大量に積まれてるけど198円なんて書かれてるから、手を出すのに抵抗がある。でもなー、タマゴが無いと色々困るんだよね。

「あれ？ 美晴ちゃん……だったよね？」

タマゴの前で、買う買わないをグルグル悩んでいる所に名を呼ばれ、呼んだであろう人物に視線をスライドさせた。あー、覚えてはいる。

「えーと、マスターのお孫さん？」

ごめん。覚えてはいるけど、名前までは覚えて無かった。さすがに年上の人間にこの呼び方は無いなって思うけど、失礼ながらこれしか出て来なかった。

……私も史稀の事を言えた義理じゃないな。
きたがわふみひろ

「北川文紘です、文紘って呼んでね。」

彼も気に入らなかったのか、微妙な表情で訂正する。まあ当然か。

「ははは……文紘さんすみません、今度はちゃんと覚えときます。」

「いや、責めてる訳じゃないんだけどさ。それより、何でタマゴの前で百面相してんの？」

は？ 百面相？？

「そんな事してませんって！！」

タマゴを買うか買わないか悩んでいる姿はそんな風に見えたのか？ だったらそれは相当恥ずかしい。

「んー、じゃあひよつとしてこれかな？ もう無いみたいだもんね。」

彼はカゴからタマゴのパックを取り出して見せた。もちろんそれはタイムセールの品で、私は思わず凝視してしまった。人様の取り分を狙おうとか意地汚い事を考えてた訳じゃなくて、こんな人もタイムセールで買っただなど、外見とのイメージのギャップに驚いただけだ。

「……ええ、そうなんですけど、ちょっと来るのが遅かったみたいで。」

「じゃあ、どうぞ。」

そして差し出された８８円のタマゴ。非常に魅力的ではあるものの、微笑む彼に私は困惑した。だからね、人様の取り分を狙おうだなんて事は考えて無いんだってば！

「何ですか？」

「ん？ 遠慮しないでいいよ。でもその変わり、またお店に来てね。」

「営業ですか！？」

「そういう事。」

ギブアンドテイク。なるほど……。

「そういう事なら遠慮なく頂きます。」

渡されたタマゴを割れないようにそつと受け取ると彼はまた笑った。

この人はこの顔で色々得をしてそうだ。葵や聡太くんもキレイな顔してるけど、不器用で色々ある。でも彼は、顔の作りだけでなく愛嬌まで兼ね備えてて、たぶん世渡りが上手なんだろうな。と、何となく思った。私もそんなに器用な人間じゃ無いから、少しだけ羨

ましい。

「じいちゃんはさ、あの店もう趣味でやってるからそんなに稼ぎ無いんだよ。だから、もっとお客さん増えてくれないと、俺の給料分捻出できないんだよね。」

タマゴ売り場から、牛乳目指してゆるゆると移動しながらそのまゝ二人で話す。そんな気はしてたけど、やっぱりマスター趣味だったのか？ 常連さん達の憩いの場ではあるものの、その分新規の客はあまりいない。ずっと入り浸ってる訳じゃないから、半分以上イメージだけど。私の行った時に知らない顔つてのは滅多に見ない。

「大手や外資は強いんですか？」

「それはまた大きく出たね、でもまあそういう事なのかもね。小さな喫茶店より大型チェーンの方が入りやすいんだよね。常連さんも大事だけど、そればかりじゃ新しいお客さんは入れない。それに長話ばかりしていると回転率が問題だね。本当、新しいお客さんにも来てもらわないと先はジリ貧かってさ。」

そう語る彼は、とても真面目に店の事を考えている。就職失敗して押しかけたとか言ってたけど、それは冗談めかしてただけで、本当の所は違うような気がする。『店を引き継いで、続けて行きたい』そんな決意が見えた気がした。

「だから今、集客作戦考えてんだけど、何か無いかな？」

「おー、面白そうですね。」

「そう？」

賛同されて悪い気がしなかったのか、嬉しそうな表情を見せる。彼がこの顔であそこにいるだけで、一部の層の集客効果は十分にありそうだ。

「とりあえず、外から見える位置に文紘さんが居れば、イケメン好きの女の子や、若い男の子が好きなお婆さんだけは増えるんじゃないですか？」

「……ねえ、それ素直に喜んでいいのかな？」

「もちろん。間違いなく褒めてますよ。」

言い方が直接的過ぎたのか、にこやかに言ったのに複雑な顔を返された。看板娘じゃないな、息子？ の効果はきつとバカに出来ない。

「面白い子だね。」

「はい、似たような事はよく言われます。」

ついさっきも、史稀に『変なやつ』と言われて来たばかりだ。私は別にそれを嫌だとは思わない。むしろ褒め言葉だ。その方が普通と言われるよりよっぽど良い。

「あ、でも今の雰囲気壊すと怒られますよね？」

「そこなんだよねー。」

彼は、顎に手をやり眉根を寄せる。そして極端な事を言い出した。「流行りものだからって、メイドとか駄目だよねー？」

「それは完全に店が変わってるじゃないですか？ 怒られるとか通り越して、常連さん近寄れなくなりますよ？」

「やっぱり駄目か。」

「ある意味面白そうですね。けど、それ人件費かかるんじゃないですか？ あ、文紘さんがメイドやるとか？」

「高校ぐらいの時ならまだしも、今この体格じゃ女装は自信がないなあ、執事でいい？」

女装を勧めても怯みもせず軽快に返事が返って来た。この人は相当ノリがいい。そして、話術が巧みそうだ。『敵に回してはいけない』本能的にそう思う。

「格好だけなら平気かもしれないですけど、旦那様とかお嬢様って言っていると、確実に引かれるんじゃないですか？」

常連「マスターのお友達。つまり年輩者の多い常連さんは、どれだけの許容範囲があるのだろう？ うちの母は面白がってこき使いそうな気もするが、それは完全に少数意見だと思う。」

そして私もそんな変化は望んでない。勝手な感傷、勝手な意見だという自覚はあるけど、家族の思い出である通い慣れた場所は、そ

のままであつて欲しい。

「だよねえ……。」

「あ、ちよつとすみません。」

話している途中、不意にコートのポケットが揺れた。取り出した携帯は「ワルキューレの行進」を鳴らしている。着信だ。

二つ折りのそれを開くと『和歌奈』と表示されていて、思わず時間を確認した。右上に表示された18:21という文字に、そのまま切ってしまうのか？　なんて考えが過ぎるものの、それをやるときつと後が怖い。

その間にも徐々に大きくなっていく音量に、私は諦めて通話ボタンを押した。出なくなつて何を言われるかくらいは想像がつく。絶対に遅いつていうお叱りの電話に違いない。

「おねえちゃん遅いつ！！」

耳に当てるとすぐに妹の大きな声がして耳から離れた。お願い、もつとボリウム考えて欲しい。

「ごめん、ごめん。」

「もー、お腹すいたよー？　おねえちゃんいつまで買い物してんのー？」

「分かつたから、分かつた。早く済ませて帰るから待ってて、じゃ。」

さつさと話を終わらせて、一方的に電話を切つた。長引いた所で『遅い』と『お腹がすいた』以上の言葉はどうせ出てこない。空腹で力リ力リするの何とかならないかな？　って思うけど、そういう子供っぽい所が姉としては嫌いじゃないから何も言わない。

「ごめん、随分時間食っちゃったかな？」

そう謝つた文紘さんも、携帯を出して時間を確認していた。結局10分くらい立ち話をしてたのかな？　でも、謝られるような事じゃあないんだな。

「いえ、文紘さんのせいじゃないですよ。実はここに来る前に、もう道草しちゃってるんですね。……私、普段から寄り道多いから、

妹にはよく怒られてるんです。」

「ああそうなんだ。何か想像付く。」

……もしもし？ 何を想像して笑ってるんですか？

「でも美晴ちゃん偉いよね、自分が忙しいから家事のほとんどをやってくれて助かるって、お母さん言ってたよ。そんなの今時なかにかいないよ？」

母さんってば余計な事を……。

「別に偉くなんか無いですよ。その方が効率が良いだけです。」
本当にこれが全てだ。

私は別に特別な事をしているつもりは無い。家の事は家族の誰がやったっていい。母さんは外で仕事をしてるから、時間のある私がやっているだけだ。それに私は美味しいご飯が食べたい。だから妹に任せるのは安心出来る範囲でのみだ。『偉い』とか『凄い』と思われるのは違うと思う。そしてとても苦手だ。

「ところで、クラシック好きなの？ それともワルキューレ限定？」
「はい？ たぶんクラシック全般好きですよ。専門的に勉強してるわけじゃないから、詳しくはないですけど……。」

一つ前の質問からの急激な変化に、質問の意図を量りかねる。駄目だな、やっぱり彼の方が一枚上手だ。

「そっか、美晴ちゃんありがと。おかげでちょっといい事思いついたよ。」

「おかげって、何もしてないですよ？ 所で、どんないい事思いついたんですか？」

「まだ内緒。ちゃんと形になったら教えてあげる。だからまたお店に来てね。」

「はあ。」

ほくほくとした表情つてのはこんなのかな？ そんな事を考えて彼を眺めていると、手にした携帯がまた鳴った。

「今度はラ・カンパネラか。メールかな？ 早く帰ってあげないかね。」

正解。この曲はメールの着信だ。

「……そうですね。」

彼の予想に違わずそのメールは妹からで、内容はタイトル無しのお腹すいたのー！の1行のみ。本当に夕飯を急がなくてはいいないらしい。

乾いた笑いを漏らした後、私は彼と分かれて残りの買い物を急いで済ませた。そして帰宅後、腹ペコ怪獣の妹に、散々文句を言われた事は言うまでも無い。

実は何かが変わったのかもしれない

「美晴、最近楽しそうね？ 何か面白い事でも見つけたの？」

朝食時、笑顔で問う母の言葉に、自信作の玉子焼きを口に入れ損なった。

「あら、落ちたわよ？」

分かってる。そんな実況はいらない。

「……えつと、何で？」

母は食後のお茶を啜りながら、楽しそうに私を眺める。その行動にとても嫌な予感がして、その視線から何とか逃れたいとは思うものの、母の席は真正面である。

いや、そもそも逃げる理由なんか無いはずなのに、どうしてこんなに居心地の悪い思いをするのだろうか？ 追うから逃げる。逃げるから追う？ 強いて言えばそんな心境だろうか？ ただ実際、こういう時の母は油断ならない。母には娘をからかって楽しむ悪い癖があり、この危機感はその経験から生まれたものに他ならないからだ。「何でつて、美晴が楽しそうだからよ？ 美晴は何かに熱中してる時、とても楽しそうなんだもの。」

母は事も無げに言ってくれたが、残念ながら自覚は無い。そうか、見るからに楽しそう……にしたのか。反省、反省。もつとしつかり隠しておかないと。そんな簡単にばれるようだと、色々な事に支障をきたす。

「えー、おねえちゃん、今何かの作戦やってんのー？」

諜報員1号こと、3つ離れた妹の和歌奈も、興味津々に話に加わる。

「別に、何もやってないよ。」

作戦なんてのは本当にやっていない。聡太くんの写真と、修学旅行の時の葵写真の販売は近々やろうと思ってるけど、今はまだ準備もしてない。それに、わざわざ作戦名なんか付けてはしゃいでるの

は妹の方だ。

でも確かに最近は大充実してる。史稀の事を探るのは楽しいし、文紘さんが考えてる『いい事も』とても気になっている。好奇心が刺激される事ばかりで、確かに浮かれてたかもしれない。

「えー、何かやる時は教えてよ？」 また、理佐ちゃんと一緒に協力するからね！」

理佐ちゃんは聡太くんの妹であると同時に、妹と同年の親友だ。ついでに『兄思いの妹』である前に、相当の『お祭り好き』でもある。私の諜報員2号として積極的に活躍してくれているのも、そんな所があつての事だ。友達と一緒に騒ぐのは楽しい。しかも、特別な状況ともなれば更に楽しい……という所だろう。

「はいはい。まったく立派な協力者が居て、私は幸せ者ですよ。」

のりの佃煮の載ったご飯を、妹はとても美味しそうに食べている。私はそれを眺めながらお茶を啜った。まだご飯は少し残っているものの、肝心の食欲の方が母のせいで何処かに行ってしまった。

「さて、私はもう出る準備しなきゃ、いい報告があつたら教えてよ？」

壁の時計を見た母は、食器を流しに置いた後、そう言い残して慌しく洗面所に消えた。確かに、私もそろそろ準備をしなければならぬ時間だ。でも、その前に食器は洗っておきたい

「和歌奈、早く食べちゃって。」

妹を急かして、自分の食器を流しのタライに置き水を張る。じつと蛇口から出る水を眺めていると、自然と溜息が零れた。

基本的に私は母には敵わない。親子であるせいだろう、似たもの同士である事は間違いない。イタズラ大好き、好奇心旺盛、お祭り好きのお節介。母も私もそんな性分だ。

しかし、そうであるが故に、経験値という点に於いては、どうしたって母には適わない。私の行動そして思考というものが、読まれるんじゃないかと時々感じる。

もちろん母の事は好きだ。感謝してるし、尊敬もしてる。けど、

苦手意識が無い訳じゃない。はつきり言って今正に、その苦手意識の真っ最中だ。

……いい報告って何？ 母は一体何が言いたいんだ???

しかし、それから私は史稀を見かける度に声をかけ続けた。母の言葉の謎は、今いくら考えたって分からない。それより史稀を探して、彼の事を知る方が楽しい。

基本的にまずは溜息を吐かれる。それから鬱陶しいとばかりに無視しようとしてくれる。けど負けない、そのくらいの方がやる気が出るってもんだ。

「史稀は何してるの？ 私はこれから買い物行くんだけどさ。」

「ねえ、今日は見える？ 見えたらどんなのか教えて。」

「いつまでそうしてるの？ まさか一日中とか？」

「史稀ってさあ、どんな集中力と忍耐力してんの？ 私は飽きたら止めちゃうな。」

私は彼にひたすら話しかける。

彼は彼で迷惑そうにしつつも、結局は律儀に返してくれる。

そんな態度が面白くって、私はつい笑ってしまう。

すると彼は、少しむくれる。

そんな他愛の無いやり取りが、楽しくてしょうがない。

「目では見えないものを見ようとしてる。」

「まだ見えない。見えたらいいんだけどな。」

「時間はあるさ、まだ。……今の所はな。」

「集中は切れるまで。時間見て驚く事もあるな。」

何を言ってるんだか分からない部分もあるけど、総合していけば

そのうち考えてる全貌が見えるかなって、とりあえずふーんって聞
いてた。

そのうちそんなに邪険にされる事も無くなって、溜息の種類も何
となく変わった。彼の張ってるバリアも『しょうがないなあ』って
くらいのレベルまでは落ちたような気がする。何となくだけど手ご
たえがあつて、ここまで続けた甲斐があつたつてもんだ！　って、
私は更に張り切っていた。

そして今日は、学校からの帰りに史稀を見つけた。大体いつもこ
のくらいの時間に彼を見かける事が多い。

でも今日は、じつと何かを見てるんじゃないかって、家の傍の横断歩
道で信号が変わるのを待っている。私は『珍しいっ！　これは絶対
捕獲だ！』って肩にかけた鞆を抑えて全速力で走った。だって本
当に珍しいんだよ？　彼の日常風景って。

「史稀！」

信号が青に変わる寸前、歩き出すより前に彼のコートの袖を掴ん
だ。急に走って心臓バクバクだけど、目的を果たした達成感で充実
している。

> i 3 4 4 0 3 — 4 2 0 4 <

「……またお前か、懲りないなあ。」

驚いた様子で振り向いた彼は、その言葉ほど呆れた様子は無い。
相変わらずの邪魔な無精ひげと、何にもしてない髪の毛。このフラ
ットと出てきましたって感じは、近くに住んでるんだだろうか？　それ
ともただ無頓着なだけだろうか？

「うん、だって、見かけた、から。」

「見かけても、放っとけばいいだろう？」

「だって、何か、せつかなのに、嫌じゃん。」

弾む息を整えながらじゃ、切れ切れにしか言葉が出なくてもどかしい。そうしてゐるうちに信号が変わり、南北方向の車が動き出す。内心悪かったかな？ と、思いはしたけど、彼が不満を口にしなかったから、まあいいかとそのままにした。溜息は漏れてたけどね。

「何で？」

「面白いもん。」

即答だ。私の行動基準には『面白い』か『面白くない』かが大いに係わってくる。

「……何だそれは？」

でも私は笑って誤魔化した。こういうのは感覚的なもので言葉には出来ない。言い換えればこれが私の性格で、こうであるからこそ『私』なのだ。

すると彼は、目を瞑って上を向きしばらく黙り込む。

一体何を考えてるんだろう？ 私は彼の出方を待つ。どうせまた、大いに呆れられてでもいるんだろうか？ しかし、その予想は大きく外れ、もう一度歩行者信号が青に変わった頃に、彼は突然不思議な事を言い出した。

「じゃあお前、絵のモデルやらないか？」

「はっ？ 何？……絵？」

「そう、絵。」

「……ひよつとして史稀は、画家？」

そう問うと、彼は薄く笑いこう答えた。

「なりたいとは思っている。」

そうかそうか、卵なのか。私の中の彼のメモに『画家の卵』と肩書きを追加しておく。私の推測ではないきちんとした情報は、たぶんこれが初めてだ。インデックスの名前だって自称でしかない。

しかし、前途多難ってやつなのかな？ 彼の笑みには焦りと自嘲が混じっている。頑張っても報われないのは辛い。でも、その努力の全てが報われるほど、この世界は優しく出来ていない。同情なんてする気はないけど、何となく自分の将来を重ねてしまう。芸術の

道は厳しい。母に憧れて、写真の道に進みたいと思っている自分にとって、それは人事ではない。

「普段物や風景を見て描いてはいるけど、人を描いてみるのも面白いかなと思ってな。」

面白い……って私の真似か？ でも納得は出来た。絵を描くためにあんなに真剣に見てたのか。

「ふーん、いいけど？ あ、ヌードでも描く気？」

「それは興味無いな。」

残念ながら後半の冗談は、冗談とも取ってもらえず、間髪入れずにあっさり否定された。まあ、肯定されても困るけど、でもその反応は何だか面白くない。別に自分の容姿に自信があるわけじゃなし、そんなに胸がある訳でもない……けど、私にも女のプライドはある。勝手に傷付いただけだけど、心の奥に仄暗い炎が宿るのを自覚した。

「……じゃあ、どんな絵描くの？」

「目には見えないもの。」

私のテンションが下がるうが高かるうが、彼の答えは以前と変わらない。けど、目には見えない私って何？ やっぱ彼の言う事はいまいち分らない。

「一体何を描く気なんだ？」

煙に巻かれた心地がして不満いっぱいの方は、傷付いた分も上乗せして、疑惑の目を思いつきり彼に向けてみた。けれど、彼は私に笑いかけて横断歩道を渡り始める。

「まあ楽しみにしとけ。じゃ、俺コンビニ行くから。」

気が付けば信号は再び青で、呆然としてるうちに点滅が始まる。

道を挟んだ反対側には、薄く明るい緑色がイメージカラーのコンビニがあつて、確か今は何かのコラボの新メニューのキャンペーンをやってたはずだ。彼の姿がその店に消えるまで、何故か私はじつと見ていた。

「……なんだ、史稀も笑えるんじゃない。」

そして私は、本人が聞いてたらたぶん怒りそうな感想を、はっき

りと口にした。でもその声は、動き出した車の騒音にかき消されてしまう。

それに、もう落ち着いていた心臓が、また激しくバクバクしだした音も、たぶん騒音が掻き消してくれていたと思う。

音楽を聴いて思う事は人それぞれだ

店の扉を開けるといつものようにベルが鳴った。しかし、いつもとは何かが違って妙な気分になる。

「あ、美晴ちゃんいらしゃい。」

この声の主は文紘さんで、客の居ない店内で一人グラスを磨いている。そうだな、気分は貸し切り？ でも、この間の話を思い出すとさすがに心配になる。

「約束通り来ましたよ。」

何か一緒に注文した方がいいのかな？ って考えた時、やっと気付いた。

「あ、そっか。サテイだ。」

「当たり前。ジムノペディ。よく分かったね？」

カウンター席。彼の目の前に座ると、すぐにおしぼりと水が置かれる。少し意外そうな反応をする彼に私は少し得意な気分になった。「曲自体は有名じゃないですか。色々BGMで使われてるし、これ幻想的でいいですね。」

愁いを帯びたピアノの音が、店内に溢れている。その澄んだ音に耳を傾けていると、水の隣に注文していないミルクセーキが当たり前のように置かれ、くすぐったい気分だ。マスターだけでなく、文紘さんも同じようにしてくれる事がとても嬉しい。

「はい、美晴ちゃんスペシャル。」

「あ、どもです。」

早速カップに冷えた手を伸ばして両手で包み込むと、じんわりと温かい。口に運ぶといつももの甘さが広がり、思わず顔が緩む。味も温度もマスターが用意してくれるのと一緒にホッとした。

「そうだ。ねえ、マスターは？」

そしてこれはいつもと違う。今までは一人だったから、当然といえば当然なんだけど、いつもカウンターの向こうにいるマスターが、

いない状況というのは初めてだ。

「ああ、じいちゃんはお出前中。昔馴染みのところにね。」

「出前？ マスターが？」

文紘さんが入った事で自由な時間が出来たのかもしれない……とは思っていただけ、まさか出前？ しかも御大自らってどういう事だ？ って、でもそれは私の早とちりで、それにはまだ続きがあった。

「もう店に来れなくなっちゃった人の所でね、お見舞いも兼ねてるからどうせしばらくは帰ってこないよ。ついでにちよっとお願い事もしたしね。」

「なるほど。」

……そっか、それなら納得だ。でも誰だろう？ 三滝のおばあちゃん最近見てないし、高畠のおじいちゃんも会ってないな。見かけなくなった人達を思い出して結構しんみりしてたのに、その雰囲気やぶち壊して突然晴れやかな声が上がる。

「だからね、今は自由時間。」

ちよ、ちよっとそれ台無しだから。でも私の思いなんかお構いなしに、サボリ宣言をした彼は、涼しい顔で自分のためのコーヒーを注いだ。

「そうだ。ねえ、知ってる？」

ゆったりとコーヒーを楽しんでいた文紘さんは、思い出したように口を開く。

「この曲は、ギリシャ神話の神々を称える祭りの絵を見て創作されたらしいよ。」

「そうなんですか？」

このジムノペディは、ゆったりとした染み入るような曲で、私の抱いているのギリシャの神々のイメージとは大きく異なる。この神話の神々は、守る者ではなく畏れられる者。もっと荒々しくて、人間くさくて、滑稽で、利己的だ。その気まぐれや、欲、そして嫉妬

で人間は多大な被害を被る。でも、抱くイメージは人それぞれ……という事なのだろう。

「夢のイメージみたいな曲だと思ってました。」

そう、私はそんな風に思っていた。

「そっか。でもこれ、全裸で踊る様子を描いた壺の絵らしいんだな。」

むせた。おまけに咳き込んだ。それほどまでに衝撃を受けた。裸で踊るって何!?

「大丈夫?」

「……はい、ものすごくイメージとかけ離れてただけです。」

「美晴ちゃん、変な想像した?」

「はい、過分に……。」

私は口にするのも恥ずかしいほどの乱痴気騒ぎを思い描いた。でもそういえば、古代のギリシャでは神聖な儀式全裸で行う。なるほど、ならばその絵というのも、そんな場面を描いたものかもしれない。

「美晴ちゃんもか、やっぱりそう思うよね?」

彼と二人、顔を見合わせて一通り笑って、一息ついたところで彼は改まって口を開いた。

「昔の壺を見てさ、遙か古に思いを馳せる。この曲は、そのサティの物思う部分なんじゃないかなって、俺はそう解釈してみたんだ。」

彼はカップの中のコーヒーを見つめて語る。

「もう信仰する人のいない、物語として伝わるだけの神々。そして信仰している人々を閉じ込めた絵……そういうのってロマンを感じない?」

そして私を見て優しく微笑む。けど、素直じゃない私の心中は複雑だ。

「全然視点が違うんですね。」

そんな所まで考えられなかった自分が齒痒くて、思わずカップを掴む手に力が入ってしまう……けど、そんな自分も情けなくて、こ

っそり深呼吸をして力を抜いた。

「そうかもね。音楽家はロマンチストだよ。俺も最初解説聞いた時、頭抱えたんだよ。この考察は、もう一度改めて考えてみた結果まあ、当たってるかどうかはサティに聞いてみないと分かんないけどね。」

都合良く勘違いしてくれた彼は、やたら優しい顔をする、思い出し笑い……なのかな？ うん、その時の事でも思い出しているのかもしれない。

人の悪い私は、それをからかいたくなっただけ、たぶん私には扱いきれない。彼の方がずっと上手だろうと本能的に感じ、からかうのは止めておいた。

やがて曲が終わり、プツプツという雑音の後に訪れた静寂は、とても不自然で落ち着かなかった。同じ空間に変わらない人物。けれど、ただ間に曲があるというだけで、その空間の印象がまったく違う。

男のひととの距離感が実はよく分からなくて、とりあえずふざけるようにしてる私には、まだ文紘さんと二人だけって状況は苦手らしい。BGMの効果は偉大だ。

「次、何がいい？」

だから彼の申し出にホツとした。

カウンターから出た彼を私は自然と目で追う。彼は年季の入ったレコードプレイヤーの前に立つと、回転盤の上のレコードを丁寧にケースに戻した。

プレイヤーは長年磨かれて艶の出た木製の筐体。その横に置かれた大きなラックには大量のレコードが納められている。これもマスターが大事にしてるもので、CDすら廃れてきた今もずっと現役だ。しかし、私も曲を探そうとラックに近付くと、ラックの状況が違っていった。余裕を持って置かれていたレコードは、ぎっちりまとめて押し込まれている。そして、空いた筈のスペースにはクラシック

のレコードが見事に埋まっていた。

「クラシック好きなんですか？」

パッケージを適当に引っぱり出して一枚つつ眺めながら、以前スパーでされた質問をそっくり返してみる。

「まあまあかな？ 母が好きでさ、昔は家にいると何かしら流れて色々聞かされたな。最近はCDに取って代わられてるから勝手に持って来たんだ。」

「いいんですか、それ？」

「気付いてないんじゃないかな？ これどう？」

「好きですけど、喫茶店のBGMじゃないですよね？」

彼が持つパッケージの、指差した場所にはブラームスの『ハンガリー舞曲 第5番』と記されている。激しい情熱と垣間見える弱さがアクセントのドラマチックな曲は『チャップリンの独裁者』でも使われた曲だが……店内のBGMには向かないだろう。

「まあそうかな、俺もこれ好きなんだけどな。じゃあ無難にピアノ・ソナタ？」

何故か残念そうな言い方をするんだなと感じたが、その理由はすぐに解る。

「でもさ、他にお客さんいないんだから好きな流しちやおうよ。」なるほど。BGMの選曲ではなく鑑賞会のつもりらしい。よくよく見れば、彼が手に取って選んでいるのは交響曲ばかりで……って、あれ？

「そういえば、カラヤンの指揮ばつかですね、」

「うん、ファンだったらしいよ。彼が亡くなった時は、部屋閉じこもったまんま出て来なくて、うちの食糧事情が大変な事になったんだって。俺は小さかったからあんまり覚えてないけど、親父が必死に料理してた姿は記憶にあるなあ。」

いかにもおかしそうに笑っているが、そんなレコードを勝手に持ち出していいんだろうか？ 本当は大事に保管しててあつた物なんじゃないかと、緊張しながら改めて棚を眺めていると、気になる

一枚を見つけてしまった。汚したり傷を付けたら一大事だなと思い、私は慎重にかつ丁寧に出来るだけそつと抜き出した。

「マ・メール・ロアだ。」

モーリス・ラベルのマザー・グースを題材にしたピアノ連弾の組曲。なので、もちろんカラヤンでは無い。テレビなんかで所々聞いた事はあるけれど、全部を通して聞いた事はない。

「それ聞く？」

「はい。」

彼に手渡すと、慣れた手つきでパッケージから取り出し、そろりと盤に乗せた。

特有のプツプツという音の後、緩やかにピアノの旋律が流れ始める。最初の曲は『眠れる森の美女のパヴァーヌ』美しくも儚さを感じるメロディーが店の中に溢れ出た。

これはピアノの曲だけど、BGMには向かないなと感じた。こんなにスゴイ曲を、聞き流してしまうなんてもったいない。

丁寧に奏でられるピアノの音は、鳥肌が立つほどの優しさが込められていて、私は言葉が出なかった。それほどまでに今までに聞いた曲とは全然違う。私はピアノなんて弾けないから偉そうな事は言えないけど、同じ楽譜を使っても、人によって奏でられる音が違うという事実、改めて驚かされた。

そんなレコードをちゃんと持っている文紘さんの母親は、本当に音楽が好きなんだと……本当にそんなレコード持ち出して良いのか？ と、私はもう一度心配になった。

「あのね、最近ここで色々クラシック流してるんだ。」

曲が2つめの『親指小僧』に変わり、湧き上がる水のように螺旋のメロディーが流れ出た頃、文紘さんがまた話し始めた。最初の曲は始めから終わりまで、二人とも黙って聴いていた。私は何も喋れなかった。……ってのが本音だけど。

「何か理由あるんですか？」

「うん、予習のためにね。」

「予習？ コンサートにでも行くんですか？」

「外れ。」

まだ棚でレコードを物色していた私が振り返ると、カウンターに戻っていた文紘さんは、二杯目のコーヒーを注いで悪戯っぽく笑った。

「ここで生演奏やつてもらう事になってね、お客さんに予習させてんの。」

……そっか、私が予習させられてたんだ。そんな明確な理由があるとは思ってもみなかった。こういう表情が嫌味にならずに似合う人って、看板としての素質があるんだらうなって、彼を見てるとつくづく思う。

「音大生に伝^{つて}があつてさ、食事で釣^{つて}週末にやつてもらう事にしたんだ。来週の金曜から始めるからよかったら来てね、ぜひお友達と一緒に。」

後半の部分に力がこもっている所が何とも言えない。

「分かりました、声掛けてみますよ。文紘さんのお給料のためにね。」

だから私も、後半の部分に力を込めて返した。

それから二人で大笑いして、笑ってるうちに曲は『パゴダの女王、レドロネット』の、どこかエキゾチックなメロディーに変わっていた。

気まぐれ Cake Cooking

夕方学校から帰ると、適当に脱がれた妹の靴ともう一つ。別の靴がきちんと揃えて玄関に置かれていた。おそらくは理佐ちゃんのものだろう。

私はそう予想をつけたが、たぶんきつと外れてない。その証拠に、奥から聞こえる楽しそうな声……の片方は理佐ちゃんだ。

そんな事を考えながら自分の部屋に入り、荷物を置いて着替えを済ませる。そして、休みの日に撮った写真を現像しようと、母の仕事場である現像室に向かう途中、ついでに空の弁当箱を置きにキッチンに寄ると……理佐ちゃんと妹が真っ白になってて驚いた。

流し台を見れば、口の開いた小麦粉の袋と、粉まみれのボウル。

なるほど、白い粉の正体は分かった。でも、中世のヨーロッパじゃないんだから、頭に小麦粉振りかける必要は無いと思う。しかもブロンドじゃ無いから、急に白髪にでもなったみたいで違和感があるな……って、真面目に考えてしまった私はどうなんだろう？

「……理佐ちゃんいらっしやい。」

「えへへ……お帰りなさい。」

とりあえず挨拶をした私に、真っ白な二人は気まずそうな笑みを貼りつけ、固まっている。怒られるとも思っただろうか？

流し台の上には、他にも計量器、電動の泡立て器、ケーキ型、マーガリン、砂糖とそれに刺さった軽量スプーン、卵の殻に、牛乳パックが放置されている。

「ねえ、何でケーキなの？」

「おーっ！」

息ぴったりに歓声が上がる様は見事で、まったく仲がいいなと感心した。

「何で分かるんですか？」

何故か目をキラキラ輝かせながら、理佐ちゃんが前のめりになって訊いてくる。けど、何故って言われても……。

「いや、そこ見れば一目瞭然だと思う。」

ケーキ型が置いてあるんだから、普通に考えればケーキしか無いだろう。

「えーとね、クリスマス近いからケーキ作りの練習しようかって話になったの。」

妹がようやく先程の問いに答えてくれたものの、やっぱり腑に落ちない。理佐ちゃんは知らないけど、料理なんてまったくしない妹が、ケーキを作ろうだなんてどういう風の吹き回しなんだ？

「じゃあ、今年のケーキは手作りする気？」

「んー、別にそんなつもりは無いんですけど……」

「お店の方が、絶対美味しいと思うし……」

私の疑問に二人は目を逸らし、それぞれ歯切れの悪い事を言っている。それじゃあ一体、何のための練習なんだろう？ ……私は益々二人の考えている事が分からなくなって、考えるのを放棄した。

「えーと、じゃあ私はどうした方が良い？ 『1.手伝う……』って言うか私が作る？ 『2.放つとくから自分達で最後まで頑張ってみる』さあどっち？」

「あのー、『3.もうやめる』ってのは無いですか？」

理佐ちゃんは、控えめながらも選択肢を追加した。私もその考えに便乗して、もう一つ選択肢を増やしてみる。

「じゃあ、『4.自分達でキレイに片付けて終わる』でもいいよ。」

いくら散らかしてくれても、自分達できちんと片付けてくれるのなら私は別に構わない。しかし、結局二人で協議した結果は、期待通りとはならなかった。

「1でお願いします。」

「……そうですか。じゃあ、まずはベランダで粉払つといで、二人共真っ白だよ。」

はい、と殊勝な返事をしながら出て行く二人を見送って、私は密かに溜息を漏らす。

「別に、最後までやってくれても良かったんだけどな……。」
今は私一人だから、そうこぼしてみた。

二人を追い払って改めてキッチンを眺めると、そこは予想以上に酷い事になっていて、思わず笑った。特に途中でひっくり返ったらしい、ボウルの中身がもったいない。しかし、これはこれで仕方が無い……と、割り切るしかないんだろう。彼女達も頑張ってたんだ……途中までは、だが。

これがレシピかな？ マグネットで壁に張られた印刷物を外し、目を通す。至って普通のスポンジケーキの写真の横に材料と、下には手順が記されている。

私はそこに書かれた手順を眺め、もつと効率の良い手順を再構築していく。だって、洗い物は少ない方が良い……と言っても、この状況を考えれば今日はさすがに手遅れ……か。

途中の生地になん少し手を加えた後、指定より少な目にした小麦粉を振るいにかけている所で二人が戻ってきた。

「さすがおねえちゃん、もうここまで!？」

「美晴さん早い!」

いやいや、君達がベランダで遊んでいたただだよ。と、内心では思ったものの、口からは違う言葉が出る。

「慣れたよ。」

ゴムベラで小麦粉をさっくりと混ぜ合わせ、クッキングシートが貼りつけてある型に混ぜ合わせた生地を流し込む。貼りつける作業は面倒だから、これがやってあるのはグツジョブだ。

あらかじめ予熱しておいたオーブンに入れて、スタートボタンを押す。正しくは電子レンジのオープン機能なんだけどさ。

とにかく後は25分後に呼ばれるのを待つだけだ。

さて、その間に片付けようか……と、思ったものの、カウンターの向こうからじっと見ている二人が非常に気になる。

「……洗い物くらいする？」

そう声をかけると、

「うん、そのくらいは出来るもん。」

と、妹は不貞腐れたように返してきた。

二人に場を譲り、私はとりあえずソファに陣取りテレビを点けた。時間を考えれば、写真の現像なんて後回しだ。まだ宿題も手付かずだから、今日の事にはならないかもしれない。

それにしても……今日の晩はどうしたものか？ 毎日やってると、献立なんか思いつきもなくなる。

テレビに何かヒントは無いものかと、ローカルニュースを見ていたものの、水族館に新しい仲間が増えたとか、街のイルミネーションが始まったとか、豪華おせちの中身に、デパートの中身丸見えの福袋。クリスマスまでだって、まだもう少しあるつてのに、それをすっ飛ばして正月の話題に随分と熱心だ。でも、私にとっては、まだまだ先のおせちなんかより今晚の方が大問題だ。

キッチンからは、まだ楽しそうに洗っている音がする。甘い香りが漂いだしてからは、更にテンションが上がってた。

ぼんやりとテレビを見つめ、頭の中では冷蔵庫の中身を思い浮かべる。本当に何作ればいいんだろう？

やがて電子音が鳴り、結局何も決まらないうちにレンジに呼ばれた。キッチンでは歓声が上がっているものの、私はそんなにお気楽な気分になれない。

溜息と共に勢いをつけて立ち上がり、キッチンに向かう。二人を避けて奥に入りレンジの扉を開けると、後ろから再び歓声が上がる。……そんな喜びられても、まだ焼けてるかどうかは分からないんだけどな。

竹串を刺して焼け具合を確認すると、どうやら中までちゃんと火は通っているらしい。

「うん、焼けてるみたい。」

今迄で一番大きな三度目の歓声上がり、私は思わず吹きそうになる。まったく呆れるほど元気だ。だけど半面、素直でとても微笑ましい。

「ところでこの後どうすんの？ クリーム塗ったりとかすんの？」

しかし、二人は顔を見合わせて首をかしげる。

「はっ？ この先の事は、考えてなかったとか？」

「うーん、どうやったたら美味しいかな？」

「クリームもいいけど、チョコもいいよね？」

まさかの無計画。ここまで思いつきの勢いだけで動いていたとは、さすがに思っていなかった。私にはこの子達の自由さが時々理解できない。否定する気は無いけど、受けるショックは結構大きい。

「あ……えっと、どっちにしても今日は無理だよ？ 冷めないと思うにもできないからね。それに、クリームやチョコも家には無いしさ。」

既に理佐ちゃんは帰った方が良い時間で、もちろん今から買いに行くのは勧められない。けれど、二人の意気消沈っぷりがあまりに見事で、何かフォローしなければいけないような気分させられてしまう。

「あのさ、明日材料買ってきて、続きをやればいいんじゃないかな？ こういうのは一晩寝かせた方が、卵が馴染んで美味しいんだって。」

「そうなの？ じゃあ明日続きやろう！」

「うん、明日の帰りはスーパ―寄ろうね！」

「明日学校で、どう飾るか相談しようか？」

「うん、帰ってから色々考えてみるよ。」

……まったく、機嫌が直るのが早いな。

明日の予定が決まると理佐ちゃんはパタパタと帰って行った。この子は何気ない動作が女の子らしくてとても可愛い。おまけに帰り際、「お邪魔しました。」って笑った顔は、さすが聡太くんの妹だなんて再認識させられた。性格は兄よりずっと積極的で行動的だと思うんだけどね。

……さて。いつもより取りかかりが遅くなったけど、本当にご飯どうしよう？ 困った事に、夕飯のメニューはさっぱり何にも決ま
ってない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9988x/>

不思議な人。

2011年11月10日10時57分発行